筑紫女学園大学リポジト

Middle Construction snd Categories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/435

中間構文とカテゴリー

緒 方 隆 文

Middle Constructions and Categories

Takafumi OGATA

1．はじめに

本稿はカテゴリーという観点をもとに中間構文を考察する。そして中間構文は、主語Xを含むカテゴリー内での特徴付けをおこなう構文であると論じていく。特徴付けとはそもそも、他の成員と異なる特性があることを述べることである。カテゴリー内の他成員と異なることを示すために、本稿では背景化のプロセスがおこると述べていく。その上で中間構文の認知モデルを示し、カテゴリーとあわせて中間構文のさまざまなふるまいを説明する。従来の研究では、中間構文は動詞を中心として論じられることが多かった。しかし本稿では動詞から論じるのではなく、中間構文の特性を通してふるまいを説明する。こうすることで様々に広がりを持つ中間構文を、一元的にとらえていこうとする。

以下の構成は２節で中間構文とカテゴリーの関係を述べ、３節で認知モデルを提示する。４節で擬似中間構文を扱い、通例の中間構文と同じ説明を試みる。また５節で中間構文の副詞表現を、６節で中間動詞を考察する。最後に７節で中間構文と似た特性を持つ関連構文を見る。

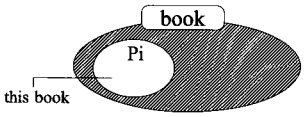
2．中間構文とカテゴリー

中間構文は、主語の特性を述べる文である。動詞が表すeventを引き起こす特性を、主語が持っていることを述べる。いわば主語の特徴付けを行う[注1]。「他のものと違って」主語Xには何々の特性Piがあることを示す。「他のものと違う」ことを示すさいに、背景化のプロセスが必要になる。特性Piを持たない成員を背景化することで、他とは異なる特性を明確にすることができる。

ただし中間構文の場合この背景化は、主語Xを含むカテゴリー内に限定される。というのも種類が全く異なるものを比較しても違うのは当たり前で、異なる特性がすべて特徴になってし

まう。そうではなく主語Xとカテゴリーが同じという共通土台をもとに、その違いを特徴付けるのが中間構文といえる。このことをThis book reads easily.を例にとり、図示したものが(1)である。

(1) This book reads easily.



主語this bookは、[read easily]を導く特性Piを持つ。このとき特性Piがない成員(読みにくい本)が、カテゴリー〈book〉内に存在しなければならない(図では斜線部分)。その成員を背景化することで、this book は他の成員と違って[read easily]の特性Piを持つという特徴づけがなされる。

むろん客観的には読みやすい本はカテゴリー〈book〉の中に他にもある。しかし主観的には「他の本と違って」この本は読みやすい、とこの本を特徴付けている。そのため主観的には(1)のような図でとらえていると考えられる。

それでは中間構文の主語が総称名詞の場合、カテゴリーはどうなるのであろうか。(2)では、Chickens, bureaucrats, glassが総称名詞であって、主語がすでにカテゴリー全体を表している。

(2) a. *Chickens* kill easily. b. *Bureaucrats* bribe easily. c. *Glass* recycles.

(c: Fagan 1992:57)

この場合さらに上位カテゴリーが対象となる。つまり上位カテゴリーの成員の中に、背景化されるものがあればよい。(2a)ではおそらく食肉となる動物の殺しやすさが問題となっている。そのため食肉となる動物という上位カテゴリーで、例えば牛、豚と違って、鶏は殺しやすいのであれば、牛・豚などが背景化される成員となる。(2b)では収賄を受ける職業の人たちという上位カテゴリーが考えられる。ここでは例えば検察官とか、裁判官とかいう成員が背景化される。(2c)では使用済みのゴミとなったものという上位カテゴリーで、コンクリートとか廃材といったリサイクルできないものが背景化される成員となる。

こう考えてくると(1)のthis bookが手元にある特定の一冊の本なのか、それとも書名・出版社が同じ本（印刷数分だけの数）を指すのかという２つの解釈はここでは問題にならない。というのも一冊の本の解釈の場合、背景化される他成員もまた個々の本になり、同一書名の本という解釈の場合、背景化される他成員もまた同一書名を持つ本になるだけの違いだからである。

すなわち主語が総称名詞だろうが、なかろうが、中間構文においては、つねにカテゴリーの成員間での特徴付けであって、その範囲を超えない。そのカテゴリー内に背景化する成員さえあれば、従来必須と言われた副詞表現も、中間構文で不要となる(5.2節で後述)。

(3) a. This dress buttons. b. This book could sell.

(a: Fagan 1992:57, b: Roberts 1987:232)

(3a)ではボタン留めしないドレスもあるし、(3b)では売れない本もある。背景化できる成員がカテゴリー内で存在すること(存在を想定していること)が、中間構文では必要なのである。逆

に背景化される他成員がなければ非文になる。

(4) a. *This book reads. (cf. This book reads easily.)

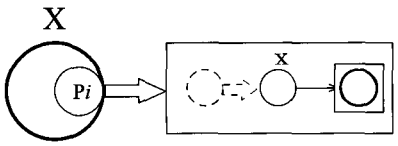
b. *This bread cuts. (cf. This bread cuts easily.)

(4a)ではbookというカテゴリー、(4b)ではbreadというカテゴリー内で、背景化する他成員がない。本はすべて読まれるものだし、パンはすべて切ることができる。そのため非文となる。

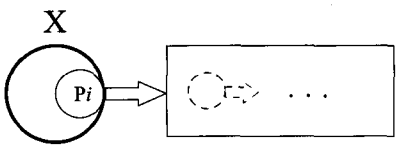
3．中間構文の認知モデル

ここでカテゴリー内での特徴付けを、認知モデルを通して考えていきたい。中間構文を認知モデルで考察したものはいくつか提案されている (Langacker 1990, 谷口1994, 2005, etc.)。それらと本稿との違いは、主語Xが最初(一番左)に設定されていること、そしてeventの中身を詳しく設定しない点が異なる。こうする理由は後述することにし、まず本稿での認知モデルを示したい。

(5)



(6)



提案として(6)が中間構文のモデルになるが、説明の便宜上(5)から始めていきたい。

(5)は典型的な中間構文のeventを含んだ認知モデルになる。主語Xの特性Piが活性領域となり、□で囲まれたeventの生起をひきおこすことを示している。(5)のeventでは、含意されたeventの行為者が主語(被動者)Xに働きかけ、何らかの変化した状態になることを表している。

とはいえ本稿ではeventの中身、もっと言えば動詞の特性に制約をもうけない。中間構文にとって不可欠な部分は、(6)に示すように、(i)主語Xの特性Piが活性領域となり、(ii)それによりeventが引き起こされることが示されることと[注2]、(iii) eventの行為者が含意されることの3点と考える[注3]。

これはとりもなおさず中間構文が、行為者とは異なる他の要因によって、eventが引き起こされる特徴をもつことを主体的に述べる構文だと述べているにすぎない。このように中間構文の動詞の特性を規定しなければ、周辺的用法を含み入れた形で中間構文を説明することができる。例えばオランダ語には自動詞の中間構文(後述)が存在するし、英語においても他動詞構文の目的語以外が主語にくる擬似中間構文がある。また各動詞においても、コンテクストによって中間構文の適否がゆれる。こうした実態をふまえると、動詞によって中間構文を規定したり制約するのではなく、むしろ動詞の制約はゆるやかにし、それ以外の要素によって中間構文を規定し制約する方がより広く深く中間構文をとらえることができると考える。それ以外の要素とは(i)カテゴリー内での他成員を背景化することによる特徴付け、(6)にあるように(ii)主語Xの特性Piによって、eventが生起され、(iii)そのevent内にevent起動者(行為者)が含意されていること、になる。この3つを用いて、5節で中間構文のさまざまなふるまいを考察する。その前に

次節で被動者以外が主語にくる擬似中間構文を見る。

4．擬似中間構文

中間構文の主語が、対応する他動詞構文の目的語でないものがある。擬似中間構文 (pseudo-middle)、非人称中間構文とも呼ばれる構文で、中間構文の主語が、対応する他動詞構文の斜格に対応する (Fagan 1992, 熊谷 1993, Nakamura 1997, 本田 1999, etc.)。(7)では道具を表す名詞が主語に、(8)では場所を表す名詞が主語になっている。

(7) a. This pen writes nicely. b. This razor cuts well.
c. That chisel carves well. d. This cream polishes nicely. (Nakamura 1997:139)

(8) This lake fishes well (Yoshimura 1990:497)

これら構文は、通例の中間動詞(対応する他動詞構文の目的語が主語になっているもの)とは異なる認知モデルで説明されることが多い。しかし本論では通例の中間構文と同じく、(6)の中間動詞のモデルを持つと考える。確かに(5)に示すような通例の中間構文とは、eventの中身が異なるが、中間構文の特性としては何ら違いはない。よって道具や場所が主語にくる中間構文も、被動者が主語にくる中間構文も同じとみなしていく。

それではなぜ道具や場所が主語にくる中間構文は、生産性が低いのだろうか。これもまた(6)のモデルから説明される。中間構文は、主語の名詞の特性が、event生起を引き起こすことを示す構文である。しかしながら道具や場所で、event生起を引き起こすほどの特性を持つものが少ない。被動者の特性によってevent生起が影響を受けることはあっても、道具や場所によってevent生起が影響を受けるのは、それらがそうした機能を属性として持っている場合に限られる。よって生産性が落ちるが、だからといってこれら構文が特殊なものとして見なす必要は全くないと考える。

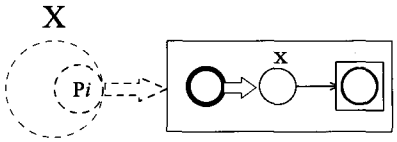
5．中間構文に現れる副詞

中間構文の特性として、動作主及び動作主指向副詞があらわれないこと、副詞が義務的に必要であることがあげられてきた[注4]。これらについて２節・３節での議論をもとに論じていく。

5.1.動作主と動作主指向副詞

中間構文では動作主は明示的に現れないし((10))、動作主指向副詞も現れない((11))。このことは(6)から説明される。動作主が現れたり、それを指向する要素が出れば、動作主が活性化されてしまう。これを示したのが(9)である (理解しやすさのため(5)をもとに作成)。主語Xの特性Piによって、eventが引き起こされることを示すのが中間構文であるのに、その部分が薄れ、もともとの動作主が起動者になってしまう。活性領域がずれてしまうため中間構文の属性と矛盾し、非文となる。

(9)



(10) *Bureaucrats bribe easily by managers.
(Keyser and Roeper 1984: 406)

(11) *The people kill intentionally.
(Nakamura 1997:137)

では動作主なるものがfor句で現れた場合、適格になるのはなぜであろうか。(12)では本来動作主となるべきMary/Billがfor句として現れている。しかしこのfor句はeventの起動者として現れているのではなく、eventが生起する条件を提示しているにすぎない。実際eventが生起する条件を修飾語として付加することは(13)にみるように何ら問題はない。

(12) a. That book read quickly for Mary.
b. No Latin text translates easily for Bill. (Stroik 1992:131)

(13) These shirts wash *in cold water only.* (吉村 1991:114) (イタリックは著者)

よって動作主／動作主指向副詞が現れないのは、中間構文が、主語Xの特性Piによってeventの生起が導かれる文ということに起因する。

5.2. 中間構文の副詞

(14)のように中間構文では副詞類が現れないと非文になることが多い。

(14) a.*This knife cuts. b.*This car handles. c.*Chickens kill.

しかし中間構文にとって副詞は義務的要素ではない。副詞の有無は、カテゴリー内での特徴付けという観点から説明される。2節ですでに述べたように、中間構文は主語Xを含むカテゴリー内において、背景化する他成員が存在しなければならない。主語Xの特性Piを持たない成員を背景化することで、主語Xの特徴付けが成り立つ。他と異なり、主語Xは何々の特徴を持つとなるからである。(14)の例文でいけば、[cut]しないknife、[handle]されない車、[kill]されない(特性として不死身の)鶏など存在しない。つまり背景化する成員が存在しない。すべてのカテゴリーにあてはまる特性を述べているため非文となる。

従ってカテゴリー内で他成員を背景化さえできれば、中間構文に副詞はいらないことになる。実際(15)−(18)の例文は、副詞がなくとも適格である。(15)は副詞表現なし、(16)は否定、(17)は強勢、(18)は助動詞を含む例になる。

(15) a. This umbrella folds up. b. This dress buttons.
(a: Fellbaum 1985:23, b: Fagan 1992:57)

(16) a. This meat doesn't cut. b. This dress won't fasten.
(a: Fellbaum 1986:9, b: Fagan 1992:57)

(17) a. The bread DOES cut. b. These bureaucrats BRIBE.
(a: Roberts 1987:195, b: Rosta 1995:132)

(18) a. The floor might wax. b. This book could sell. (Roberts 1987: 195, 232)

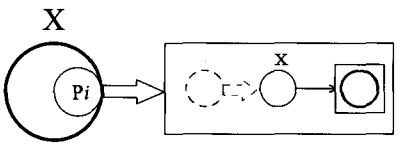
(15a)では［傘がしまえること］は傘共通の特性であるが、［折りたためない］傘は数多く存在する。つまり背景化される成員が存在し、適格となる。(15b)でも同様で、［ボタンどめ］しないドレスの成員が存在するため適格となる。(16)では、背景化される成員(切れる肉／留めれるドレス)が容易に想定でき、適格な中間構文となる。(17)は強調のDOESが含まれたり、動詞部分に強勢がある。そもそも強調とは「他でもなく○○は」という意味を表す。つまり背景化される成員が前提となる。ここでは他でもなくこのパンは切れる/官僚というものは収賄されるという解釈であり、適格となる。(18)では助動詞を含んでいる。ここでも背景化される成員(might not waxの床, could not sellの本)が存在することが前提されており、適格となる。

中間構文はカテゴリー内での特徴付けを述べる文である。特徴付けるには、カテゴリー内で異なる成員、背景化できる成員が存在しなければならない。他と違って、主語Xはこのような特性を持つと述べるためである。区別できる特徴、それを副詞が担っている。よって区別できる特徴があれば副詞は不要になる。次節では副詞によってカテゴリー内の特徴付け行う事例を考察する。

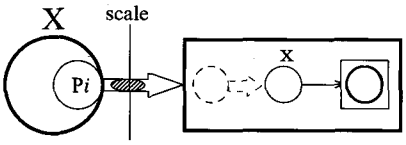
5.3. 副詞の種類

副詞はカテゴリー内での特徴付け、つまり他成員と異なる特性を述べるために付加する。よってそれだけで他成員と区別する特徴がある場合、(15)－(18)のように副詞は不要である。この場合(19a)のような認知モデル(＝(5))を持つ（説明のしやすさのため(6)ではなく(5)をこれを含め以下使用)。主語Xの特性Piにより、eventが生起することを示している。event自体に特徴があるので、副詞は不要となる。しかしevent内容だけでは十分な特徴を持ち得ない場合、副詞が必要となる。この場合２種類ある (cf. Fellbaum 1986, 谷口 2005)。一つはeventの起こり方についての特徴付けを行う。図示したものが(19b)で、(20)が例文である。二つめはeventが起こった結果について特徴付けを行う。図示したものが(19c)で、(21)が例文になる。

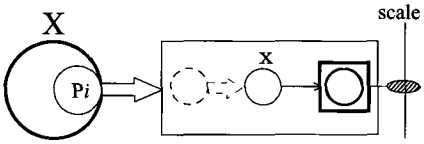
(19) a.



b.



c.



(20) a. This book reads easily.　　b. This knife cuts easily.

(21) a. She photographs beautifully.　b. Cheap bread dices unevenly.　(b: Fiengo 1980)

まず一つめ、eventの起こり方についての特徴付け(19b)を見る。例えば(20a)では、[本が読まれる]というevent自体はカテゴリー〈book〉に共通の特性であるが、それがどのように引き起こ

されるか(ここではeasily)が副詞によって特徴付けされている。eventの起こり方に程度さがある場合、そこを副詞で表現することで特徴付けることができる。特徴付けにより、他成員を背景化する。一般に難易度の副詞と呼ばれる副詞がこれに相当し、基本的にevent生起の難易を特徴付けとする。

二つめはeventが起こった結果についての特徴付けである。例えば(21a)では、[写真に撮られる] というevent自体はカテゴリー〈人〉に共通の特性であるが、その結果がどのようなものか(ここではbeautifully)が副詞によって特徴付けられている。eventの起こり方に程度さがない場合、とりわけこの方法で特徴付けがなされる。そもそも写真を撮られる際の難易度など程度さはない。そのため結果の違いによって、他成員を背景化し区別している。達成度の副詞と呼ばれるものがこれに相当する。

以上見たように中間構文は副詞に関して3パターンある。(i)カテゴリー内での特徴づけがすでにeventにあれば副詞不要、(ii) eventの起こり方に程度差がある場合、程度差で特徴付けが可能、(iii) eventの起こり方に程度差がないか、結果状態に特徴があれば、結果状態で特徴付けを行うの3つである。平たく言えば、中間構文は(19a)を基本形とし、eventの起こり方(はじめ)(19b)と、起こった結果(おわり)(19c)のどちらかを特徴付けることで、他成員と区別する。このとき特徴付けの働きをするのが、副詞といえる。

しかしなぜ中間構文では(15)－(18)のような例がまれで、副詞が義務的といわれるほど副詞によって特徴付けを行うのだろうか。この問いへの答えは、カテゴリーがにぎっている。中間構文はカテゴリー内の成員間での特徴付けを旨とする。そのため共通土台としてカテゴリーが存在する。カテゴリー共通の特性に＋αする特徴付けこそが、中間構文の本来の姿だからである。とはいえもともとの特性にこだわる必要もない。(22)はインターネットからの引用だが、滑り込ませるというのは本の本来の特性ではないが、カテゴリー内での特徴付けとして成立し、中間構文として認められる。

(22) Portable and tangible, *a book slips easily into a tote bag* as we dash to catch the train. (イタリックは著者)

とはいえ中間構文に現れる動詞が表すeventは、カテゴリーにとって奇抜なものではなく、本来備えている特性がほとんどであるため、副詞によって特徴付けが行われてきた。そのため中間構文に副詞が義務的要素として議論されてきた経緯がある。しかし上で述べたように、あくまでカテゴリー内での特徴付けが副詞出現の理由となっている。

6．中間構文に現れる動詞(制約)

本節では中間構文に現れる動詞について考察したい。本稿の立場は基本的に、動詞に制約を課さないという立場をとる。他動詞用法をもとに中間動詞の規定を試みる研究とは、この点で明確に異なる。とはいえ中間構文が作れる動詞には、あきらかに制限があり、動詞の種類によって作れるか作れないかが決まっているかに見える。そこで以下中間構文になれないと思われて

いる動詞の種類を列挙し、その制限がどこから来るのかを見ていきたい。結論を先回りして言えば、中間構文の特性から説明されると主張する。特性からくる制約を列挙すると、(23)のようになる。

(23) a．主語Xが、Xを含む最小のカテゴリー内で特徴付けられなければならない。

b．動詞によって表されるeventを引き起こす要因を、主語Xの特性Piが持っていなければならない。

c．動詞によって表されるeventの本来の起動者(行為者)が、含意されなければならない。

(23a)は中間構文がカテゴリー内で特徴付けを行い、他成員を背景化する構文であることからくる。(23b)は主語Xの特性Piが動詞によって表されるeventを引き起こす要因を持つことから生じる。(23c)は行為者が必ず含意されるところからくるが、一歩進めてさらに言えば、この制約により主語Xが行為者と誤解されるような中間構文も排除される。行為者と誤解されるということは、行為者が含意されるどころか、もともとの行為者が消えてしまっているからである。以下動詞ごとに見ていくが、制約ごとにまとめて考察する。制約(23a)に関連する動詞を6.1節、制約(23b)に関連する動詞を6.2節、制約(23c)に関連する動詞を6.3節で扱う。

6.1.カテゴリー内で、背景化する成員を持たない動詞(制約(23a))

6.1.1.表面接触動詞

hit, hammer, kickという表面接触動詞は、行為対象への単なる接触を意味しており、接触した結果までの意味がない。こうした表面接触動詞は、(24)に示すように中間構文にならない。

(24) a. *The ball hits easily. b. *This metal hammers easily.

c. *The door kicks easily. (谷口 2005:188)

これは制約(23a)カテゴリー内での特徴付けの観点から説明される。

これら動詞は単なる接触を意味する。そのためカテゴリー内に背景化するのに十分な他成員が存在しない。たとえば(24a)でballというカテゴリーで、接触にあたり程度差のあるball(成員)を想定できない。ballに大小その他違いがあったとしても単なる接触に程度差はなく、他との区別がつかない。(24b,c)も同様でhammerでの接触、足での接触に程度差などなく、背景化する成員を各々カテゴリー〈metal〉、カテゴリー〈door〉で見つけることができない。つまり程度差がないところに程度差で特徴付けをすることなどできない。もし程度差がないのであれば、結果状態で特徴付けたらいいのではないかという話になる。実際(25)ではsmooth, unconscious という結果を表す表現が加わり、中間構文が適格となっている。Rappaportはhammerやknockが変化をもたらす動詞となっているために適格になったとするが、変化というより結果状態により特徴付けをしたために適格となったと考えられる ((25)はRappaport 1993: 175)。

(25) a. This kind of metal hammers *smooth* fast.

b. Elephants do not knock *unconscious* easily.

つまりhammerで接触しにくい成員は考えにくいが、smoothという結果にならない成員(metal)はある。またknockという接触しにくい成員(動物)は考えにくいが、unconsciousという結果状態になりやすい成員はいる。そのため動詞のLCSを使うまでもなく、中間構文の特性から表面接触動詞は説明することができる。

6.1.2. 摂取動詞

eat, drinkといった摂取動詞は、通例中間動詞にならない。これらは表面接触動詞と同じように、行為の結果対象の変化まで含意しておらず(cf. 谷口 2005)、単に摂取する行為をさす。口に入れのどを通すだけであれば、カテゴリーfood, wineの中に程度差が異なる成員を見つけるのは難しい。一方消化には程度差があり、消化がよくない成員(food)は容易に想定できる。そのため(26a,b)は不可で、(26c)は適格となる。

(26) a. *This food eats well. b. *This wine drinks well. c. This food digests well.

(谷口 2005:192)

ただし (27) のように、他と区別する情報が加われば適格となる。谷口は次のような例を提示する。

(27) a. The soup eats like a stew. (van Oosten 1986:99)

b. This wine drinks like it was water. (谷口 2005:192)

谷口は中間構文は、「CAUSE-CHANGE-LOC(STATE)の3分節からなるP-Transitive relationをベースとし、その中からMover/Patientの変化過程に相当するthematic relation (CHANGE-LOC(STATE))をプロファイル」すると考える。そのため(27)でも何らかの変化があったと考える。(27)は「対象の変化は主観的なものであるが、各々摂取という行為を通じて対象が別のものに変化したかのように感じられる場合には、P-transitive relation の条件を満たす」としている。しかし(27)では変化はないと見るのが自然であろう。eatするときにthe soupはstewと似た特性があること、drinkするときにthis wine がwaterと似た特性を持つと述べているにすぎない。つまり他と区別する特徴を述べているのである。

(27)に対する谷口の説明を取り上げたのは、中間構文を動詞の観点から説明することは、限界があると考えるからである。今まで様々な研究で、affectedness, Vendlerの分類におけるAccomplishment, Activity、LCSによる提案がなされてきたが、擬似中間構文や(27)のような例も含めて説明することが難しく、例外により反駁されてきた。中間構文を規定するのは、(23)のような特性からくる制約であって、動詞そのものではないと主張する。そのため十分なコンテクストが与えられれば(特徴付けがなされれば)、適格な中間構文を生成することができる。被動者の結果状態を特徴付けたものが多かったため、affectedness, Accomplishment, Activityなどの制約が課せられてきたが、実際は特徴付けさえあれば中間構文として成立すると考えられる。

6.2. 主語Xの特性によってeventが引き起こされない動詞(制約(23b))

6.2.1. 作成動詞

make, buildなどの作成動詞は通例中間構文を作れない。主語Xが行為の結果はじめて生じるものであるため、矛盾が生じ非文となる (cf. 谷口 2005, 本田 2005)。つまりevent生起を起こすべく出発点となる主語Xが、最初に存在しない。それにも関わらず、eventを生起するというのは明らかに矛盾だからである。存在しないものが、eventを引き起こすことはない。

(28) a. *Wool sweaters knit easily. b. *Those shoes manufacture in Brazil.

(Taniguchi 1994:191)

とはいえ作成動詞であっても適格な中間構文が存在する。

(29) a. These toys assemble easily. b. Black-and-white film develops easily.

(Fellbaum 1986:17)

これは完成品の特性ではなく、その部品／素材が持つ特性によりevent生起が起こるからと考えられる。(29a)ではthese toysの部品の特性、(29b)ではblack-and-white filmの素材の特性が、活性領域となっている。eventをCAUSEするものが事前に存在するため、矛盾が生ぜず適格な中間構文となる。また同族目的語及びそれに準ずる目的語が、中間構文にならないのも同じ理由による (cf. 谷口2005, 本田2005)。

6.2.2. 状態動詞

状態動詞は中間構文に現れない。これは認知モデル (6) から説明される。中間構文では主語の特性により、eventが引き起こされなければならない。状態動詞の場合、単に状態を表すだけであり、単なる特性文である。そのため非文となる[注5]。

(30) a. *The answer knows easily. b. *John believes to be a fool easily.
c. *Fred considers sick easily. (Keyser and Roeper 1984:383, 407, 409)

6.3. 主語Xが潜在的行為者より弱い動詞(制約(23c))

以下の動詞はevent生起にあたり、行為者等より強い特性を持つことができず、中間構文として許容されない。行為者等の影を弱めることができず、いわば(9)と似た感じになってしまい不適格となる。

6.3.1. 知覚動詞

知覚動詞の場合、対応する他動詞構文の主語は経験者である。その経験者の影を弱めることができないために中間構文は非文となる。そもそも知覚は知覚対象というより、知覚者(ここでは経験者)に大きく左右される。そのため知覚対象の特性がeventを引き起こすことができず、中間構文を作ることができない。知覚対象はeventの第一生起要因とはなりえないのである。

(31) a. *The mountain sees clearly from a distance.

b. *The noise hears easily in a crowd.

c. *His paper understands easily. (谷口 2005:187)

6.3.2. 心理動詞

心理動詞は他動詞構文において、経験者を主語にとるfearタイプの動詞、経験者を目的語にとるfrightenタイプに分けられる。この中でfearタイプ(32)、そしてfrightenタイプの一部(33)は中間構文を作れない。(32a)(33a)が対応する他動詞構文、(32b)(33b)が非文の中間構文の例になる。

(32) a. John fears/likes/shames Mary.

b. *Mary fears/likes/shames easily. (Nakamura 1997:132)

(33) a. John depressed/frustrated/vexed/infuriated Mary.

b. *Mary depresses/frustrates/vexes/infuriates easily. (Nakamura 1997:133)

fearタイプ(32a)でいえば、fear/like/shame という感情の主導権は、主語の経験者Johnにある。感情の対象(Mary)が感情を引き起こすために積極的な関与をしないので、人によってfear/like/shame という感情は大きく変わる。いわば経験者が勝手にそういう心理・感情を持っていることを述べるにすぎない。そのためevent生起にあたり、中間構文の主語Xが行為者等(この場合経験者)より強い特性を持つことができず、fearタイプは中間構文として許容されない。

frightenタイプ (33a) では、逆に感情の対象(John)が主導権を持つ。Johnの強い特性によってdepress/frustrate/vex/infuriateという感情が起こっている。そのためevent生起にあたり、中間構文の主語Xが行為者等(この場合感情の対象)より強い特性を持つことができず、非文となる。(32b)(33b)はタイプが違うが非文の理由は同じである。中間構文の主語が対応する他動詞構文の主語より、強い要因となりえないため非文になる。

それではfrightenタイプで適格な中間構文(34)のような例はどうだろうか。

(34) a. John frightened/scared/excited Mary.

b. Mary frightens/scares/excites easily. (Nakamura 1997:132)

(discourage, amuse, annoy, bother, fluster, confuse, surprise, please, etc.)

この場合、むろん感情の対象であるJohnが主導権を持つこともできるが、経験者のもともとの特性によって、こうした感情が引き起こされることも十分考えられる。すなわち主客を反転させる事態が容易に想定でき、それを中間構文で表したと考えられる。つまり他動詞構文の目的語(経験者)がevent生起にあたり、行為者等より強い特性を持つ場合が想定できる。そのため(34)のような中間構文は適格になると考えられる。

6.3.3. 自動詞

中間構文は行為者以外が主語にきて、event生起がその主語の特性により引き起こされるこ

とを示す。そのため基本的には自動詞は中間構文になりえない。というのも項が一つしかなく、二番手の項がない。そのため行為者がそのまま主語に通例くるからである。

(35)では主語の特性が、eventを引き起こすという点で中間構文と同じである。しかし(35a)で言えばvanishの唯一の項が主語にきている。そのため単に特性を述べる文に過ぎず、中間構文とみなすことはできない((35)はインターネットより引用、イタリックは著者)。

(35) a. If you feel that *your lipstick vanishes easily,* just contour your lips with a lip pencil ... .

b. Once going, *the car runs nicely* at highway speeds.

しかし項以外の要素が主語にくる、すなわち本来の行為者以外が主語にくる場合、自動詞の中間構文は可能であろうか。オランダ語の場合(36)のように、適格な中間構文が存在する。しかしながら英語sitの場合、インターネットでいくつか用例が見つかるが、オランダ語と同じように広く容認されるとはいいがたい。また英語では自動詞は明確に不適格と論じられるのが通例である。とはいえ、容認性が高いと思われる(37)のような例が存在するのも事実である。

(36) a. Deze stoel zit prima. [this chair sits nicely] (Ackema and Schoorlemmer 2003)

b. Het loopt lekker op deze schoenen. [it walks comfortably on these shoes] (Hoekstra & Roberts 1993)

(37) Success seldom arrives easily. [インターネット]

本稿では対応する他動詞構文が存在することが、中間構文の条件ではない。認知モデル(6)に示すように、起動者でない主語名詞の特性によって、eventが生起されることを示す構文が、中間構文と主張してきた。ただし自動詞の場合には(5)に示したeventの中身とは大きく異なるが、基本図式(6)は同じである。よって(6)であればオランダ語の自動詞中間構文を含めて、同じように自動詞の中間構文も説明することができるし、自動詞だからという理由で排除する必要はない。

それではなぜ自動詞の中間構文は、とりわけ英語では許容されないのか。この答えは、一つにevent生起への役割は、行為者－被動者－付加詞（道具/場所など）の順番になっており、自動詞は行為者のみでevent生起を引き起こすのが普通である。この条件下で行為者をさしおいて、付加詞の特性によってevent生起を引き起こすような事態が、ないというのが事実であろう。それに加え英語では、自動詞の斜格が主語にきにくいことも考えられる。とはいえ(37)のように条件が整えば容認性が高い自動詞の中間構文までも、完全否定できないように思える。

以上動詞の種類ごとに中間構文の適否がどうきまるかを見てきた。中間構文の特性を以上のように考えると、中間構文の名称は正確でないことが分かる。中間構文はその名称からして、能動文と受動文の中間に位置する構文であるかのようにとらえられてきた。しかしそうではない。被動者が主語になっているのではなく、主観的にとらえたEVENTの第一起動者が主語になっているにすぎない。そのため能動形の動詞が使われている。すなわち中間ではない。このように主観的な起動者が主語にきて、動詞が能動形の形をとる構文は他にも見られる。それを

次節で見ていく。そのことにより中間構文で動詞が能動形になっていることがなんら特別なことではないことを示したい。

7．関連構文

中間構文は、主語がevent生起を促す特性を持つことを示す構文である。そのため動詞は能動形が使われる。こうした構文は他にも見いだすことができる。具体的には対応する他動詞構文において斜格で表現されるものが、主語に現れる構文がある。すべてではないが、その中には中間構文と同じ認知モデル(6)を持つと考えられるものがある。つまり主語の名詞が、event生起を促す特性を持っていることを示す構文がある。(38)－(42)aがその例で、各々対応する他動詞構文(38)－(42)bがある。(38)はlocative subject alternation、(39)はraw material subject alternation、(40)(41)はsum of money subject alternation、(42)はsource subject alternationの例になる((38)－(42):Levin 1993:82-83)[注6]。

(38) a. Each room sleeps five people. b. We sleep five people in each room.

(39) a. That whole wheat flour bakes wonderful bread.

b. She baked wonderful bread from that whole wheat flour.

(40) a. $5 will buy (you) a ticket. b. I bought (you) a ticket for $5.

(41) a. $100,000 will build (you) a house.

b. The contractor will build (you) a house for $100,000.

(42) a. The new tax laws will benefit the middle class.

b. The middle class will benefit from the new tax laws.

(38a)では場所を表す名詞句each roomが、[We sleep five people] のevent生起を促す特性を持っていることを示している。(39a)では材料を表すthat whole wheatが、[people in general bake wonderful bread] というevent生起を促す特性を持っている。(40a)では金額5ドルがチケットを買うというeventを可能にする特性を、(41a)では金額100,000ドルが家を建てるというeventを可能にする特性を持っている。最後に(42a)ではThe new tax lawsに、中産階級が利益を得るというevent生起を促す特性を持っていることを示している。

これら構文が共通して持つ特徴は、基本的に中間構文と同じである。もっといえば基本的に同じ認知モデル(6)を持つと言える。主語がevent生起を促す特性を持つことを示す構文は、中間構文に限定されるわけでもなく、こうした構文では動詞は能動形が用いられる。それは主語の特性が、event生起を引き起こしていると見なされるからである。

ただ注意しなければならないのは、中間構文の適否条件と、これら構文の適否条件が必ずしも同じではないことである。中間構文が作れるからといって、これら関連構文すべてが作れる訳ではない。確かに認知モデルは共有するが、それ以外の要素が関わっている。(38)－(42)では目的語が生じている点がめだった相違点であるが、それが以外の要因も絡んでくると考えられる。しかしここでは単に、中間構文の動詞が能動形になるのは特別なことでないことを示す

にとどめたい。

8．おわりに

本稿では従来の研究とは異なり、カテゴリーという観点を取り入れ、中間構文を考察した。そして中間構文は、カテゴリー内での主語Xの特徴付けをおこなう文であり、その特徴付けとは後続するeventを引き起こす特性をもつというものであった。この特徴付けにあたり、副詞表現が必要になってくる場合があることを見た。副詞表現には2種類あり、各々特徴付けの特性により使い分けられることも示してきた。中間構文は動詞を中心に論じられることが多かったが、本稿では動詞により論じることをせず、あくまで中間構文の特性によりさまざまなふるまいを考察した。このことにより中間構文を広く深く説明することができると考える。中間構文はその用法において広がりを持つ構文であり、動詞により規定されていないと考える。

注

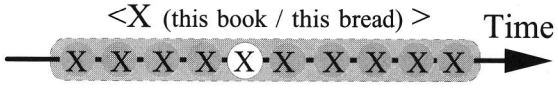
注1．総称文と似た特性を持つため、中間構文は総称文であると議論されてきた (Keyser and Roeper 1984, Condoravdi 1989, 小山 1996, Zwart 1997, etc.)。過去形や進行形にならないし、主語の特性を述べるからである。

むろん中間構文の主語は、(ia)のように総称名詞のこともあれば、(ib,c)のように総称名詞でないこともある。

(i) a. Bureaucrats bribe easily. b. This book reads easily.
c. This bread cuts easily.

(ia)は主語が総称名詞でカテゴリーを表しており、その特性を述べているので総称文といえる。また(ib,c)のように総称名詞でなくとも、各々の主語Xが時間によって輪切りされたXの集合体と考えれば、主語Xは一つのカテゴリーと見なすことができる。

(ii)



いつの時点でも主語Xが、[read easily]／[cut easily] の特性を持つことを示している。そのため(ib,c)もまた総称文とみなすことができる。習慣文でも同じことが言える。しかし単に総称文であるとのべるだけでは、多くのことは説明できない。

注2．これはLakoff (1977)、van Oosten (1986) のresponsibilityという概念に相通じるものがある。

注3．なぜ能格構文のように、中間構文では動作主の存在が消えないのかを考えたい。理由はこうである。特性Piは、抽象的な存在であって実体を持たない。そのため主体的な見えとしては、特性がeventを引き起こすが、そこには実体を持った存在の影(implicit agent)が必要になると考えられる。つまり抽象的存在では力量不足で、実体の後ろ盾が必要となる。

一方能格構文では抽象的な特性ではなく、実体をもったXがeventを引き起こす。そのため後ろ盾となるimplicit agentは不要になると考えられる。

注4. Keyser and Roeper (1984: 385) が述べるように、中間動詞は命令文や進行形にならない。

(i) a. *Bribe easily, bureaucrat! b. *Bureaucrats are bribing easily.

これは単に中間構文が特性を述べる文だからである。noneventiveという理由にすぎない。そのためFagan (1992: 53) が述べているように、特性を述べているのであればむろん進行形として現れる。

(ii) This manuscript is reading better every day.

注5. 本田 (2005: 73-77) では、(i)に示すような連結的知覚動詞構文がアフォーダンスの観点から中間構文と同じふるまいをする構文として取り上げている。しかし本稿の立場からは状態を表している点において、中間構文とは異なる。もっと言えば認知モデル(6) とは異なる種類のものと考える。

(i) a. John *looks* happy. b. This cake *tastes* good. c. This cloth *feels* soft.

(Taniguchi 1997: 270-271)

注6. 交替形の名称は、Levin, B. 1993: 79-83を援用している。また各々の交替形に用いられる動詞についてもLevin, B. 1993を参照のこと。

参考文献

Ackema, P. and M. Schoorlemmer. 2003. "Middles," Ms. UiL-OTS, University of Utrecht.

Condoravdi, Cleo. 1989. "The Middle: Where Semantics and Morphology Meet," *MIT Working Papers in Linguistics* 11: 16-30

Fagan, S. 1992. *The Syntax and Semantics of Middle Constructions. A Study with special reference to German. Cambridge*: Cambridge University Press.

Fellbaum, C. 1985. *On the Middle Construction in English.* Bloomington, In: Indiana University Linguistics Club.

Fiengo. R. 1980. *Surface Structure: The Interface of Autonomous Components.* Cambridge: Harvard University Press.

Hoekstra, T. and I. Roberts. 1993. "Middle Constructions in Dutch and English," In: E. Reuland and W. Abraham, (eds), *Knowledge and Language, Vol.II: Lexical and Conceptual Structure.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 183-220.

本多啓. 1999.「再び英語の中間構文について」『駿河台大学論叢』18: 137-156

本多啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論: 生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版会.

Keyser, S. J. and T. Roeper. 1984. "On the Middle and Ergative Constructions in

English," *Linguistic Inquiry* 15-3, 381-416.

小山久美子. 1996.「中間構文における総称性」『川村学園女子大学研究紀要』 7(1) : 21-32.

熊谷滋子. 1993.「中間構文における動作主のゆくえ」『人文論集:静岡大学人文学部人文学科研究報告』 44(2) : 85-101.

Lakoff, G. 1977. "Linguistic Gestalt," *CLS* 13: 236-287

Langacker, R. 1990. "Settings, Participants and Grammatical Relations," *Meanings and Prototypes. Studies in Linguistic Categories*, Tsohatzidis, S.L.(ed), 219-38. London: Routledge.

Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation.* Chicago, Chicago University Press.

Nakamura, Masaru. 1997. "The Middle Construction and Semantic Passivization," in T. Kageyama (ed.), *Verb Semantics and Syntactic Structures*, Kuroshio Publishers, Tokyo, 115-147.

Rappaport, T.R. 1993. "Verbs in Depictives and Resultatives," in J. Pustejovsky(ed.), *Semantics and the Lexicon*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Roberts, I. 1987. *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects.* Dordrecht: Foris.

Stroik, T. 1992. "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23: 127-137.

Stroik, T. 1999. "Middles and Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 30-1: 119-131

Taniguchi, K. 1994. "A Cognitive Approach to the English Middle Construction," *English Linguistics* 11: 173-196

Taniguchi, K. 1997. "On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective," *English Linguistics* 14: 270-299

谷口一美. 2005.『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房

van Oosten, J. 1986 *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation.* Bloomington: Indiana University Club.

Yoshimura, K. 1990. "A Study of Verbs in the Activo-passive Constructions," *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth Birthday*, Kurosio Publishers.

Zwart, J. W. 1997. "On the Generic Character of Middle Construtions," Ms., University of Groningen.

(おがた　たかふみ：英語学科　教授)